risei + trip

vol. 14

特集

地元を離れて、
学ぶということ。

特集

地元を離れて、学ぶということ。

本校には、近畿圏外からの進学を決めた学生が少なくない。なぜ履正社へ？　大阪での暮らし、学校生活は？ソフトテニスコースに在籍する、ある兄弟をクローズアップした。

右・春田将利（しょうと）さん
宮崎県立都城泉ヶ丘高校出身

左・春田頼利（らいと）さん
宮崎県立都城商業高校出身

Photographs by Naohiro Kurashina/Noriko Yoshimura(cover)

2019-2022年入学者

本校在学生の出身エリアの割合

近畿圏内	76.5%
近畿圏外	23.5%

（写真上）練習後、箕面キャンパス内にある食堂でランチ。この日はガパオライスをチョイス。（写真中）ソフトテニスコースGM・高井翔宇先生。指導法、トレーニング理論など総合的に競技を学べる。（下）過去4年間の入学者の出身エリアの割合。4人1人が近畿圏外からの入学者

台風一過の秋晴れの空の下、パコーン、パコーンと快音が響く。朝8時50分。箕面キャンパスのテニスコートで、ソフトテニスコースの学生たちが練習を開始した。ここに、兄弟で練習に励む学生がいる。2年生の春田将利さんと1年生の春田頼利さんだ。ふたりは宮崎県都城市出身。地元を離れ大阪で学ぶ道を選んだ。

兄の将利さんは高校3年生のとき、コロナ禍で県大会とインターハイが開催されず「競技をやりきることができなかった」という。競技を続けたい気持ちが強くなり、それまで専門誌を通して存在を知っていた本校ソフトテニスコースへの入学を決意。教師を目指すことも視野にあり「大学教育学」が専攻できることも決め手となった。

一方、頼利さんは高校の早い段階から履正社でプレーすることを考え、どんな練習内容で、どんな指導者がいるのかを将利さんから情報収集。親御さんもお兄さんがいるから安心と、進学はスムーズに決まった。現在はメディカルアスリート専攻で、理学療法学科の夜間部でも学んでいる。

大阪のパワーに圧倒されて。

実家は宮崎県と鹿児島県の県境にあり、見渡す限り山と田んぼ。地元での主な交通手段は自家用車か自転車で、バスや電車は「大阪に来てから初めて乗った」という。

「来た当初は梅田のビル群や人の多さに圧倒されました。電車やバスの乗り換えも複雑だし、初めて行く場所は今もちょっと戸惑います。入学後、すぐに仲良くなった同級生は長崎出身。高校時代、九州大会の会場で見ていたので声をかけました。やっぱり地元に近い人が気になります」（将利さん）

「いろんな地方出身の人がいるから、方言を聞くのが面白くて。何より、九州とはプレースタイルが違うのが衝撃でした。宮崎時代はふわっと打ってゆさぶり、前衛が決めるのが主体だったんですが、ここは逆。後衛が早くて強い球で決める。強気で攻めていくスタイルは、関西の人の気質もあるのかな（笑）」（頼利さん）

箕面キャンパスまでバスで20分ほどの、2LDKの部屋で2人暮らし。とても住みやすいという。家事は分担制だが、料理に関しては1年先に家を出た将利さんが担当する。「兄の料理、おいしいんです」。ぼそっと頼利さんがつぶやいた。

春田兄弟が在籍するソフトテニスコースは、日本で唯一ソフトテニスを専門的に学べることもあり、全国から学生が集まる。教員の高井翔宇によると現在、在籍する学生のうち関西出身者は半分くらいだそうだ。

「当初は西日本出身が多かったのですが、専門誌やSNSを通じて年々、認知が上がっています。在校生、卒業生の出身地は北海道から石垣島まで多彩。出身者がいない県は残りあと6つになりました」

履正社で、学びたいから。

ソフトテニスコースに限らず、履正社で学ぶため他府県からの進学を決めた学生は多い。スポーツと医療、トレーナー、英語の各分野を単独のみならず横断的にも学べる独自カリキュラムに惹かれてのことだ。

この4年間、多少の増減はあるが履正社の学生は近畿圏外出身者が約4分の1を占める。また、近畿圏内出身者も、6割が大阪府外からの入学者だ。兵庫、京都からの通学者が多いのは、阪急十三駅という立地のアクセスの良さを裏付けている。後に続くのは香川、愛媛、広島といった中四国エリア。遠く沖縄からの入学者が多いのも特徴だ。

期待と不安が入り混じる、初めての土地で始める学生生活。やりたいこと、目標が明確になったなら、あとは一歩踏み出すだけ。一緒に夢を追う仲間、サポートする教職員があなたを待っている。